

令和元年度

研究のあゆみ

主体的対話的で深い学びを通して、
教科のねらいに迫る

— 目的意識をもたせる学習展開の工夫 —

渋谷区立笹塚小学校

目次

I	研究主題	・・・・・・・・・・・・・・・・	P	3
II	目指す児童像	・・・・・・・・・・・・・・・・	P	3
III	主題設定について	・・・・・・・・・・・・・・・・	P	3
IV	研究の教科と視点、部会	・・・・・・・・・・・・・・・・	P	5
V	各部会の取組			
	【低学年分科会】	・・・・・・・・・・・・・・・・	P	7
	【中学年分科会】	・・・・・・・・・・・・・・・・	P	10
	【高学年分科会】	・・・・・・・・・・・・・・・・	P	17
V	成果と課題	・・・・・・・・・・・・・・・・	P	25
VI	次年度に向けて	・・・・・・・・・・・・・・・・	P	26

I 研究主題

「主体的・対話的で深い学びを通して
教科のねらいに迫る授業づくり」
— 目的意識をもたせる学習展開の工夫 —

II 目指す児童像

「学習の目的意識をもち、自分の考えを再構築できる子」

III 主題設定について

(1) 研究主題について

平成 29 年 7 月に出された新学習指導要領においては、改訂の方向性として「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」、「何ができるようになるのか」という 3 つの方向性が示された。「何を学ぶか」という観点だけでなく、「どのように学ぶか」という学び方の観点と「何ができるようになるか」という資質・能力の観点も重視されている。教科書に書かれた内容を教師が一方的な教示によって学ばせればよいのではなく、主体的・対話的で深い学びとなるような学び方を通して学ばせる。その結果、新しい時代に必要となる資質・能力については、各教科「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の 3 つの柱で整理されており、それらは学習後にも生きて働くものとして、児童の中に残るものでなくてはならないと明確に位置付けられている。

本校では昨年度、主体的・対話的で深い学びを通して、これらの 3 つの柱で整理された各教科のねらいに迫ることを研究の目的として研究を行った。主体的・対話的で深い学びは、学び方の視点であり、それ自体がねらいではない。実現すべきなのは、あくまで教科のねらいであることを念頭に置いて指導にあたりたい。そのため、まずは教科のねらいは何かを指導者がきちんと捉え、その上でねらいをより実現しやすくなるように主体的・対話的で深い学びを工夫することが大切である。①新学習指導要領から教科のねらいをおさえ、それを具現化することで単元のねらいを設定すること、②主体的・対話的・深い学びの 3 つの視点から学び方を工夫すること、③学習の結果、児童に生きて働く力としてどのような力が身についたかを明確にすること、という研究の手順をきちんと踏むことで新学習指導要領に応じた授業づくりの基礎を全教員が学ぶことが大切であると考えてきた。

「何を学ぶか」

教科のねらいを 3 つの資質・能力の点からおさえ、具体化することで単元のねらいを設定する。

「どのように学ぶか」

ねらいに迫るために「主体的な学びにするためには」、「対話的な学びにするためには」、「深い学びにするためには」という観点で学習を展開する。

「何ができるようになるか」

学習の結果、児童に生きて働く力としてどのような力が身についたのか、3 つの資質・能力の点から分析する。

(2) 昨年度の研究成果と課題

研究主題に迫るため、昨年度は国語科の話すこと・聞くこと、体育科のマット運動に焦点を当てた。

国語分科会の成果としては、以下の3つが挙げられる。①児童の実態を分析し、今必要な聞く力（話し合う力）を見出すことができた。②教師が教科書通りに教え込むのではなく、児童の言語活動を単元の中心に据え、言語活動を通して力を伸ばすための単元を開発することができた。③児童自身が中心となって行う言語活動において、教師がどのようなタイミングで、どのように支援するかを意識して、本時案を構築することができた。

課題としては、①児童の聞く力が確かに伸びたかを分析するための評価が難しい。上記の成果は指導者の視点の変容であり、単元や本時案の開発によって、児童の力を確かに育成することができたかは証明できていない。②聞く力の育成は、一単元の指導によってはできない。日常において、聞く力をどのように高め、国語科の単元においてはどの部分に焦点を当てるかを明確にしていくことが課題である。という2点が挙げられた。

体育分科会の成果としては、3点が挙げられる。①領域を統一し、さらに二本の授業は第1時に統一したため、理想の授業の在り方を検討しやすかった。②前の学年の時に学んだことを、活動を通して振り返る→新しく学ぶことを知る→自分の目標や学習の見通しをもつ、という流れは、児童の主体性を伸ばすために大変有効な流れであることを見出すことができた。③児童が目標や見通しをもつために、技の系統図、簡単な流れ、手本動画の視聴が有効であることが分かった。さらに、それらは全て児童がつかめるものではなく、児童自身が考える余地を残したものにすることで、児童が主体的に学ぶ力を育成することができることがわかった。

課題としては、①一人ひとりの児童の思考、動きを確かに見取るために教師の指導の在り方は今後も検討していく必要がある。②児童に自由に活動させる時間、教師が始動すべきタイミングをより明確にしていくことで、一層児童の力を伸ばすことができる。の2つが挙げられた。

上記のことをまとめると、『児童の活動を中心に授業を構成することができた。』、『教師の支援の仕方や価値付けのタイミングを構築できた。』、『第1時に明確な目的意識をもたせることで、児童の主体性を育むことができた』、『児童が目的や見通しをもって学習できることで主体的に学ぶ力を育成できた』ことが大きな成果と言える。

課題としては、『聞く力の評価や伸びの見取り』、『聞く力は一単元での育成は難しい』、『児童一人ひとりの思考の見取り』、『児童が自由に活動することと、教師の支援・指導のタイミング』の4点が見えてきた。

(3) 副主題について

昨年度、副主題として「課題意識・目的意識をもたせるための学習過程の工夫」と設定した。主体的な学びとなるようにするためには、児童一人ひとりが「何を解決したいのか」をいう課題意識や、「何のためにその学習をするのか」という目的意識をもっていることが重要であると考え。対話的な学びにおいても、ただ指導者が「話し合しましょう。」と指示して対話させるのではなく、児童が自ら対話を必要とし、目的意識をもった対話をさせることで、よりねらいに迫る意義のある対話となるであろう。学習過程の様々な場面において、児童に課題意識・目的意識をもたせるための工夫を行うことで研究主題に迫りやすくなると考え、副主題をこのように設定した。本年度は、体

育科のイメージが強い「課題意識」を取り、「学習過程」をより具体的に示せるであろう「学習展開」に変更し、「目的意識をもたせる学習展開の工夫」とする。

(4) 目指す児童像の設定

『主体的』『対話的』『深い学び』は切り離されるものではなく、同時に行われたり、スパイラル的に行われたりするものである。しかし、『主体的な学び』や『対話的な学び』を児童が行うためには、目的意識や必要感、自己の考えをもつことや、他者の考えに興味をもって学習に取り組むことなどが必要である。また、『深い学び』においては、『自己の考えの広まりや高まり』を実感させることが肝要となる。そのため、目指す児童像として『学習の目的意識をもち、自分の考えを再構築できる子』とする。「再構築」とは学習のスタートの自分の考えから、新たな発見などの考えの広まりや高まり、自分の考えを見直したり、自分の考えが確立されたりすることである。この学校全体の目指す児童像をもとに各分科会の目指す児童像を設定する。

IV 研究の教科と視点、部会

(1) 研究の教科

昨年の成果と課題を受け、教科を絞ることで教科の特性を踏まえながら教員全員で、研究主題に向けた研究が行えるようにする。教科は、本校児童の力を伸ばしていく必要がある国語科で行う。領域は、学習活動や学習計画、教師の指導感などがより明確になるであろう『読むこと』の文学的教材で行うこととする。

(2) 研究の視点

教科・領域は絞るが、本校では、研究主題の「主体的・対話的で深い学びを通して教科のねらいに迫る授業づくり」の根底に、教科の特性（見方・考え方）とともに、教科横断的な考え方も大切にしている。そこで、昨年度の国語科と体育科の成果と課題を踏まえ、『学習の目的意識のもたせ方』や『問い（発問）の工夫』を中心に本年度は研究を進めていくこととする。その他に、『身に付けさせたい力の明確化』、『教材観』、『児童の活動の見取り方』など、各分科会で年間を通して話し合い、研究授業だけではなく、日頃の授業改善につなげることが、一番の研究となると捉えている。年度末に1年間での各分科会の成果と課題を、日頃の授業から具体的にまとめていく、次年度の研究につなげていく。

(3) 部会のもち方

部会の構成は、日頃から授業の話をしたり、研究部会を開いたりしやすいように「低学年分科会、中学年分科会、高学年分科会」とする。児童の実態を考慮したり、研究の成果をその後の授業に生かしたりして研究を進める。

低学年分科会	○小笠原 ○寺元 ・町原 ・関 ・長沼 ・別府 ・伊藤妙
中学年分科会	○山口 ○佐藤 ・下原 ・大橋 ・前沢
高学年分科会	◎望月 ・久武 ・屋島 ・渡邊 ・伊東 ○伊藤千

○は研究推進委員会 ◎は研究委員長

V 各部会の取組

低学年分科会

I 研究主題

「主体的・対話的・深い学びを通して教科のねらいに迫る授業づくり」

— 目的意識をもたせる学習展開の工夫 —

II 分科会提案

目指す児童像

学習の目的意識をもち、自分の考えを振り返ることができる子

目指す児童像にせまるための手だて

1 【学習の目的意識をもたせるための単元展開の工夫】

◎児童の目的意識や学習意欲を高めてから、単元の学習計画を立てる。

- ・教材文の読み取りに入る前に第0次を設定し、単元の終末につながる目的意識を高める。
- ・目的意識をもたせた上で、教材文の特徴に合った読み取りと学習計画を立てる。

○並行読書により、読書活動への意欲を高める。

- ・学校図書館や地域図書館から関連図書を手配し、学年文庫として配架する。
- ・関連図書を読む機会を設けることで学習意欲を高め、叙述に沿った読み取りの力を高める。

2 【自分の考えを振り返らせるための学習展開の工夫】

◎児童に考えをもたせてから学習を進めることで、自分の考えを再構築させる。

- ・自分の意見だけでなく、友達の見を書き加えさせたり、交流して学んだことや気づいたことを書き足したりさせていくことで、自分の考えの深まりを確認できるように促していく。

○授業展開を繰り返すにより、児童に見通しをもたせる。

- ・45分の中でめあての確認と振り返りというパターンを繰り返し、再構築させる。
- ・学習方法が決まっていることで学習内容に安心して取り組ませ、個人の学びを深めながら全児童に目標を達成させる。

3 【評価の工夫】

○授業毎の振り返りを評価に生かす。

- ・授業毎に学習の振り返りをし、その場で価値つけて授業での学びや再構築を評価する。

○簡易な方法で自己評価をさせる。

- ・教師が確認しながら、振り返らせる。(挙手・口頭・記号・学習計画表の振り返り欄など)

4 【教師の役割】

○第0次の設定と関連図書の手配で、学習後につながる読書の意欲を高める。

- ・単元の学習に入る前に、第0次を設定することで児童の目的意識を高めるよう仕掛ける。
- ・関連図書の手配をし、並行読書ができるようにすることで読書活動を活性化させる。

○学習計画表の作成で児童の目的意識を高め、持続させる。

- ・児童に学習意欲や目的意識をもたせ、一緒に教材文の特徴に合った学習計画を立てる。
- ・学習計画表を作成し、毎時間、自己評価させることで目的意識を持続できるようにする。

【低学年分科会】

目指す児童像

学習の目的意識をもち、自分の考えを振り返ることができる子

《分科会提案》

- ① 学習の目的意識をもたせるための単元展開の工夫
- ② 自分の考えを振り返らせるための学習展開の工夫
- ③ 評価の工夫
- ④ 教師の役割

1 研究授業について

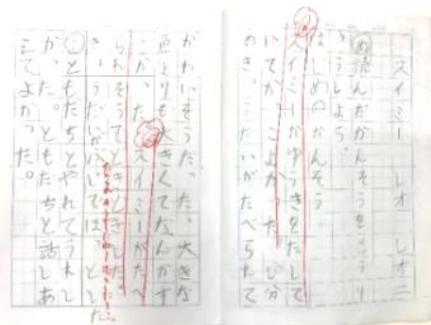
○ 第2学年 国語科 単元名 とっておきの文を見つけて本の帯を書こう「スイミー」

指導者 別府 法子

(1) 指導の工夫

- ① レオレオニの絵本を学校図書館や地域の図書館から配架し、読書活動につなげる。
- ② ノートに自分の意見を書き、交流したことを書き込むことで、自分の考えを再構築する。
- ③ 授業のまとめに振り返りを言語化することで評価に生かす。
- ④ 学習計画表を作成し、自己評価させることで目的意識を持続できるようにする。

(2) 本時の様子

	主な学習活動	○指導上の留意点
つかむ	1 前時までの学習を振り返り、本時に扱う叙述を確かめる。	○ 学習活動の流れを繰り返し行うことで、ノートの書き方など学習方法が分かるようにする。
取り組む	2 とっておきの文と理由を考える。 3 友達と交流をする。	○ 今までの場面と関連づけながら、とっておきの文や理由を友達と交流させる。  ○ 交流をする際、友達の考えが良かったら、ノートに書き加えさせる。
まとめる	4 学習を振り返る。	○ 感じたことや分かったことを自分の振り返りに書き足させる。

(3) 協議内容

- 目的意識をもって学習に取り組むための単元展開の工夫であったかという点について
 - ・ 単元の導入で動画を用いたことで、子供たちの学習意欲を高められた。
 - ・ 子供たちの「とっておき」を紹介したいという気持ちから、帯を作りたいという欲求が出てくるのではないか。
- 自分の考えを振り返らせるための学習展開の工夫について
 - ・ 単元を通して、授業の形式を揃えたところがよい。ノートの書き方を決めて授業の終末に振り返りをさせていることで、子どもたちが主体的に学ぶことができている。
 - ・ 本単元は本時まで毎回振り返りをしながら進めてきた。はじめは振り返りを書けない子供たちも、本時では書けるようになった。全員の質が上がったことが研究の成果である。
- 本時で、めあてと振り返りが合っていたのかという点について
 - ・ 場面のつながりに目を付けている子、自分の意見を言いながら話し合いができたかに目をつけている子など、振り返りを書く視点が定まっていなかった。
- 本時は、自分の経験と結びつけながら考えられたらよかったのかという点について
 - ・ 場面による。第五場面では、場面の移り変わりが読み深められていたらよい。前の場面と本時の第五場面と結びつけて考えられているところが素晴らしかった。評価基準にそのことが入っていてもいいのではないだろうか。
- 本時のめあては「交流しよう」であった。子供にとっての交流に対する目的意識について
 - ・ よりよい帯づくりのための交流であった。第三場面で「元気を取り戻した」という第五場面につながる秘密探しであったり、同じ文で違う理由を交流したりするであった。
- 2年生で「想像を広げながら読む」とは何かという点について
 - ・ 指導要領では、「オ・文章の内容と自分の経験を結びつけて、感想をもつこと、カ・文章を読んで感じたことや分かったことを共有すること」とある。読み深めるのは難しい。
 - ・ 5年生の研究授業のように、いくつかの「とっておき」が出てきたら、そこから絞る作業をすると「読み深める」ことができたのではないか。

(4) 指導・助言

講師 学芸大学准教授 細川太輔先生

- 指導・講評
 - ・ 子供たちが積極的・主体的に交流をすることができていたことが素晴らしい。
 - ・ 指導要領では、「オ・文章の内容と自分の経験を結びつけて、感想をもつこと」「カ・文章を読んで感じたことや分かったことを共有すること」で評価する場面。「経験と結びつける」とは、「自分だったら緊張して班長にも立候補できないのに…」などである。
 - ・ 前時の振り返りから始めるのはとても有効。低学年では繰り返してつなげていくとよい。
 - ・ 振り返りを隣の子に伝え合うというのは、全員ができるので良い。教師が何人か決めて当てると、他の当てられなかった子たちの活動がなくなってしまう。振り返りとは、授業を通して自分の考えを再構築すること。
 - ・ 発言が得意ではなさそうな子に発言させ、自信をつけさせたところが良い。
 - ・ 子供たちが次々に呟いている。その呟きを大切にしているところがよい。
 - ・ 振り返りと意見を徐々に区別できるようにする。低学年ではよく「学習感想」という。

- ・ 読む目的をもたせて音読させているところがよい。私なら、全場面を読ませる。場面ごとのつながりをこれだけ意識させているので、全場面を読ませると、前の場面とのつながりを考える子が増えたかもしれない。
- ・ 低学年は繰り返しが重要。毎時間活動の目的を確認していく。「今日の活動は何のために必要なの。」と聞いてあげると、本時の第五場面から読み取る目的がはっきりする。
- ・ 友達との交流場面では、発表だけで終わってしまうことが多い。本時では互いに意見を伝え合ったり、友達の言ったことをメモしたりしているところがよい。
- ・ 同じ場面で違う考えを聞いているところがよい。自分の気付かなかったことを、友達の発言を聞いて気付くことができていた。読みが深まったと言える。
- ・ 子供の意見をつなげて授業を進めるためには、板書を教師が子どもの発言を編集しないで書くとよい。発言者には最後までしっかり表現させ、途中でほかの子に説明をさせない。
- ・ 振り返りは最後の結果、学習プロセス、自分の感情、自分の変化について行うとよい。

2 成果と課題

【成果】

- 学習の目的意識をもたせるための手だてとして、第0次の捉えは日常生活やこれまでの学習と単元の接続をスムーズにする役目という捉え方がよいのではないかと。
- 子供が意見を言ったとき、「どうして？」と考えを深める問い返しがよかった。
- 並行読書など、別の作品にも広げて取り組んでいるところがよい。

【課題】

- 学習成果（教師の）を引き継ぐことができるように残していく必要がある。特に校内研究での学びを次年度にも使えるように、実践を共有していきたい。
- 学年に合った言語活動を選択する必要がある。帯は製作の難易度が高く2年生には難しい。本が一冊しかなく、帯の完成後に全員分の帯を本にかけてあげることができなかった。→ 読みの内容が反映されて、製作が簡単で、児童全員の願いが叶うものがよい。
- 言語活動一覧表（種類、向き不向き等）があると、ねらいと教材と児童の実態に合った活動を設定しやすい。

3 1年間の研究を受けての1年生の実践

- 「たぬきの糸車」～お気に入りの文を紹介しよう～

「たぬきの糸車」はたぬきやおかみさんの行動、周囲の様子を想像しやすいように表現の工夫された文章となっていることから、文章から想像した場面を切り取って紹介しやすい教材である。そこで、言語活動は「お気に入りの文を紹介しよう」とした。授業では、児童が興味関心を示したところから問いを投げかけ、焦点化して子供たちの読みの深さを一定レベルにまで引き上げた。その上で、「たぬきの糸車」が好きかどうかを問い、好きなどころを紹介したいという意欲を引き出した。そして、言語活動として「お気に入りの文を紹介しよう」を設定した。



中学年分科会

I 研究主題

「主体的・対話的・深い学びを通して教科のねらいに迫る授業づくり」

— 目的意識をもたせる学習展開の工夫 —

II 分科会提案

目指す児童像

学習の目的意識をもって友達と交流し、自分の考えを広げることができる子

目指す児童像にせまるための手だて

1 【目的意識をもって学習に取り組むための単元展開の工夫】

- 単元を貫く言語活動を示し、学習を展開する。
物語文の学習では、登場人物の人柄について読み取り、好きなセリフと共に仕掛けカードで紹介したり、他学年へ物語を紹介するために、読み取ったことやあらすじを紹介カードにまとめたりしてきた。物語文の学習では、場面読みのみで完結してしまうのではなく、目的意識をもたせるために言語活動を設定して読み取りを進めていく。人柄、キャッチコピー、好きなセリフ、要約など、何を考えさせたいかという目的から授業の展開をする。

2 【自分の考えを広げるための学習展開の工夫】

- 自分の考えを表現させる方法として、話す活動と書く活動を設定する。話す活動では、形態を変化させながら、交流する場面を設定する。ペアやグループ、全体での交流の際、何を話し聞くのか、話題を焦点化したり、相手の意見を聞いて質問や感想を伝えたりさせる。また、書く活動では、初発の感想や登場人物の気持ち、読み取ったことなど自分の考えを残しておき、友達との交流を終えてから感想や考えたことを付け足して記録させるようにする。児童が自分の考えを伝え、友達の影響も聞くことにより、多様な考えに気付き、自分の考えを広げることができるようにする。

3 【評価の工夫】

- 自分の考えや友達の影響を聞いて考えたことを書いたり、話したりして、考えが広がっていく過程、変容を見取れるようにする。ノートに自分の考えを記録しておき、交流を終えてから、感想や影響の付け足しを書かせる。

4 【教師の役割】

- 児童がペアやグループ、全体で交流する際、何を話したいのか、また相手に何を聞きたいのか、目的を焦点化する。自分の影響の報告にならないように、相手の影響や意見に対して、質問や感想を伝えさせるようにする。話すことや聞くことを明確にすることで、交流により児童の思考が広がるようにする。

【中学年分科会】

目指す児童像

学習の目的意識をもって友達と交流し、自分の考えを広げることができる子

《分科会提案》

- ① 学習の目的意識をもって学習に取り組むための単元展開の工夫
- ② 自分の考えを広げるための学習展開の工夫
- ③ ノートに自分の考えを記録しておき、交流を終えてから、感想や考えの付け足しを書かせる。
- ④ 話すことや聞くことを明確にすることで、交流により児童の思考が広がるようにする。

1 研究授業について

○ 第3学年 国語科 単元名 心にのこったことを、自分の言葉で表そう「モチモチの木」

指導者 大橋陽介

(1) 指導の工夫

- ① 単元の目標となる活動の決定
- ② 学習展開の工夫
- ③ 児童の活動の成果物や評価に用いるためのリーフレット形式
- ④ 相手の考えや意見に対して、質問や感想を伝えさせるようにする。

(2) 本時の様子

	主な学習活動	○指導上の留意点
つかむ	1 本時の学習課題・流れを知る。 「もともと臆病だった豆太が、どうして医者様を呼びにあの暗い山道をかけたすことができたのだろうか。」	○ 物語の登場人物である豆太が臆病でもあり、勇気もあることを児童の言葉をもとに振り返らせる。
取り組む	2 今まで学習してきたことを振り返り、考えたことをノートに記入する。 3 友達に自分の意見を聞いてもらったり、相手の意見を聞いたりして考えを深める。	○ 学習課題に対して根拠になる部分をノートに書き写し、根拠をもとにした自分の考えを合わせて記述させる。 ○ 意見を聞きたい友達のところへ行き、交流させる。
まとめる	4 全体で意見を出し合いまとめる。 ・ 111ページに「大すきなじさまのしんでしまうほうがもっとこわい」と書いているので、じさまのために力が出せたのだと思います。	○ 考えを発表させる。

	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「くまみたいに体を丸めてうなっていた」と109ページに書いてあるので、じさまが苦しんでいる姿を見て助けなれないといけないと思ったのだと思います。 ・ 110ページに「豆太は小犬みたいに体を丸めて表戸を体でふっとばして走りだした」と書いてありました。迷いなく走り出しているので強い気持ちをもってかけ出したのだと思います。 	
5	次時の学習を確認する。	

(3) 協議内容

- リーフレットが場面の移り変わりの読み取りに適していたかという点について
 - リーフレットに折り目がついていることで、どこに何を書くかが明確になる。書くことに抵抗感がある児童は何をどのように書くか分かりやすくなる利点があった。
- 交流のよさがバラバラになっていた。
 - 交流をすることにどんなよさがあるかということが児童一人一人で異なっていたため、バラバラになってしまった。

(4) 指導・助言

講師 山口統括指導主事

- 児童の発言に対する問い返しについて

児童が発言した時に教師が価値付けをせず、次の児童を指名している場面があった。児童の発言に対して、「なぜそう思ったの。」や「もっと聞かせて。」と言いながら、さらに児童の考えを引き出すことも必要である。
- 児童の学習感想について

教師の「学習感想を書こう」という指示だけで、友達の考えを聞き、自分の考えを広げた内容を書いていたのは日頃から書く内容について指導をしていた。日々の指導が大切である。
- 教師が見本を見せることについて

学級での話合いの仕方については、教師が率先して見本を示すことも大切である。
- 指導案はストーリー作りという点について

指導案を作る時には、ゴールから逆算して考える。目指す児童像を分科会で話合い、目指す児童像に向けて単元目標、学習計画を考えていく。よい授業は指導案を見るだけでゴールまでのストーリーが分かりやすく記されている。
- 児童に発言させる前のマネジメントについて

児童に発言させるときには、教師が事前に話す内容を確認しておき、マネジメントしていく。

2 成果と課題

【成果】

- 目的意識をもたせながら学習に取り組ませるために、リーフレット作りをさせた。リーフレットには、おすすめの場面、豆太とじさまの人物紹介、学習感想を書かせた。おすすめの場面を書くためには、リーフレットを読んでもくれる相手を意識して書かなければならない。リーフレットの表紙に絵を描いたり、見出しを見やすく書く工夫をしたりするなど、相手を

意識してまとめることができた。

- 人物の紹介を簡単な相関図に書かせることで、物語を理解できているかを把握することができた。
- 毎時間の授業の流れを同じにすることで、児童が見通しをもって学習活動に取り組むことができた。授業の導入で、学習課題を把握し、一人読みを進め、友達と自由に交流し、全体で意見を共有する学習の流れを確立することで、児童が安心して学習に取り組むことができた。

【課題】

- 目的意識をもたせるためにリーフレット作りをさせた。しかし、リーフレットに何を書かせるかは検討が必要である。今回はおすすめの場面、豆太とじさまの人物紹介、学習感想をリーフレットに書かせた。例えば、学習指導要領には文学的な文章は、登場人物の行動や気持ちなどについて、叙述を基に捉えるとある。叙述を基に人物相関図を書かせることは、第3学年にとっては難しいのではないかという指摘もあった。
- 目指す児童像である「目的意識をもって友達と交流し、自分の考えを広げる子」の交流や考えを広げるとい言葉に引きずられ、教科のねらいや目標とずれてしまうところがあった。研究主題とともに、教科のねらいや目標に迫る手立てが必要である。

【中学年分科会】

目指す児童像

学習の目的意識をもって友達と交流し、自分の考えを広げることができる子

《分科会提案》

- ① 目的意識をもって学習に取り組むための単元展開の工夫
- ② 自分の考えを広げるための学習展開の工夫
- ③ 評価の工夫
- ④ 話すことや聞くことを明確にすることで、交流により児童の思考が広がるようにする。

1 研究授業について

○ 第4学年 国語科 単元名 読んで考えたことを話し合おう「ごんぎつね」

指導者 佐藤 彩乃

(1) 指導の工夫

- ① 単元の目標となる活動の設定
- ② 学習展開の工夫
- ③ 対話後の変容を見取る「〇〇日記」の形式
- ④ 相手の考えや意見に対して、質問や感想を伝えさせるようにする。

(2) 本時の様子

	主な学習活動	○指導上の留意点
つかむ	1 前時までの振り返り、学習の流れを確認する。 ・「五場面でごんが兵十に気付いてもらえない気持ちを、(ごんが) 何で気付いてもらえないのだろうと考えていたけれど、「神様の仕業だ」思っていたという意見は、自分にはない考えだった。」 2 本時の学習課題を知る。	○ 友達のことを聞いて、自分の考えが広がったことを発表させる。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 六場面のごん・兵十の気持ちの変化をとらえよう。 </div>	
取り組む	3 六場面の1人読みをする。 4 ごん・兵十の立場を選んで日記を書く。 ・「栗を持ってきてくれたのに撃ってしまった。取り返しのつかないことをした。」 ・「(兵十が) やっと気付いてくれた。」	○ 一人一人音読させる。前時までに、ごんや兵十の行動や気持ちが分かる文に線を引かせておく。

	<p>5 書いた日記を発表し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「兵十が「ごん、おまいだったのか…」と言って、ごんがうなずいたから、ごんは分かってもらえたと思った。」 ・ 「兵十が栗を届けてくれたのに撃ってしまったから、取り返しがつかないことをしてしまったと思った。」 	<ul style="list-style-type: none"> ○ グループごとに自分の書いた日記を発表し合わせる。友達が書いた日記について、質問をしたり、考えたことや自分との違いなどを話し合ったりさせる。 ○ 全体で話し合わせる。
ま と め る	<p>6 心情曲線をもとに、ごんと兵十の心の距離が近づいたかどうかを考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 考えを発表させる。

(3) 協議内容

- 目的意識をもって学習に取り組むための単元展開の工夫について
 - 最終的に、絵巻を作成するという目的であったが、子供の姿を見ていて、絵巻を作ることへの目的意識は感じられなかった。絵巻は、場面によるごんと兵十の距離を可視化するためのものであった。それは絵巻でなくてもよかったのではないか。
- ごん・兵十日記では、ごん、兵十のどちらの視点で書いてもよいとしたが、話合いの場面では、何について交流するべきだったのかという点について
 - 交流では、自分にはない考えに気付くことが目的であった。そのためには、全員が同じ視点で日記を書き、交流する必要がある。全員が同じ土俵、共通の話題で交流ができる場面を設定する。
- ごん・兵十日記は、日記に書く分量が多いのではないかという点について
 - 毎時間、日記を書いていく中で、教科書の地の文ではなく、気持ちに迫れるようになってきたのはよかった。一方で、交流の場面での、自分にはない考えの付け足しでは、日記の文章が長すぎて、どこの部分を付け足せばよいか分からない児童がいた。日記は一行程度で短くまとめた方が交流もしやすかったのではないか。また、気持ちに迫れるようにする工夫としては、文章自体をプリントの上に貼り、そこから分かる気持ちを書いていくとよいのではという意見が挙げられた。
- ねらいは達成できたのかについて
 - 本時（第六場面）では、兵十がごんのやっていたことに気付いたことに対して、どのようなことを感じたのかということについて考えを深めることがねらいであった。しかし、子供からのいろいろな意見によって様々な視点で話が進められてしまった。「本時の一番盛り上がる場所はどこなのか。」「話させたい場所はどこの部分であるのか。」を把握し、子供の発言をねらいに迫らせていくことが必要であった。

(4) 指導・助言

講師 東京学芸大学 准教授 細川 太輔先生

- 子供の「～したい。」という思いを大切にする。
- 本時では、やるが多かった。(一人読み→絵日記を書く→グループで交流→全体交流) 教師が単元のゴールを意識し、やるべきことをシンプルにした方がよかった。
- 交流をする際には、議論を焦点化する必要がある。日記の文章が長く、要点を絞るのが難しかった。

- 全員が活動する必要がある。一人の児童による発言の場が目立った。全体の場での発言は、様々な発言が出てくる程度でよい。一人の児童に多くの時間はかけない。「Aさんが発言した～について話してごらん。」などと返し、全体→ペア→全体を使い、考えを広げていく。少人数では絞られた論点について。大人数では、広い論点について話し合いを行っていく。
- ごんと兵十の距離が分かるのは行動による心の距離だけではなく、物理的な距離もあった。そこに気付けるような指導展開の工夫があってもよかった。

2 成果と課題

【成果】

- 単元を貫く言語活動を設定したことにより、児童の主体性が高まり、自分の考えを広げようとする児童の姿が見られた。単元を通して〇〇日記を書きそれを元に友達と交流するという言語活動を設定した。授業展開前段では、自分が読み取ったごんや兵十の気持ちを反映させた日記を書いた。登場人物を指定せずに、児童が自分で選択して日記を書いたことも主体性の向上につながったと考える。その後、自分が書いた日記を元にして考えを交流した。グループ内だけでなく自由に意見を交流させたことで、より多くの友達の考えに触れることができた。また、交流後には、友達の考えのよかったところを自分の日記に付け足しさせた。内容を見ると、友達と交流したことを元にして、登場人物の気持ちの変化について付け足しをしている記述も見られ、自分の考えを広げることができたと考える。
- 毎時間の学習過程を統一したことにより、児童が見通しをもって学習を進めることができた。授業導入で、学習課題を把握し、一人読みを進めて〇〇日記を書く。その後、展開前段で友達と交流して、展開後段で全体発表をしてから、〇〇日記に付け足しをする、というような一単位時間の授業の流れを同じにして単元の学習を進めてきた。そのように展開したことで、児童が活動の見通しをもつことができ、安心して学習に参加することができたのではないかと考える。

【課題】

- 今回は日記という形式を用いて言語活動を進めてきたが、それが教科のねらいを達成するために適していたのかどうか、また児童が思考を整理するのに適していたのかどうかということは課題である。指導案検討段階から、ごんぎつねの言語活動について議論されてきたが、日記という形式を採用した一つの理由として、場面ごとに児童が登場人物の気持ちを押さえやすいのではない、という見通しがあった。しかし、教科のねらいに立ち返る視点が欠如しており、活動が先行してしまったことは反省点である。また、児童の思考が広がったかどうかを見取るために、交流の後に追記をさせるが、時系列で隙間なく書かれている日記に、後から付け足しをする不自然さも残ってしまった。
- 交流活動をする際に、どのようにして児童に目的意識をもたせるかということも課題である。交流することの必然性が、児童から湧き上がるような工夫が必要である。何のために交流しているのか、交流することのよさなどを児童が実感しながら活動させられるようにしたい。

高学年分科会

I 研究主題

「主体的・対話的・深い学びを通して教科のねらいに迫る授業づくり」

— 目的意識をもたせる学習展開の工夫 —

II 分科会提案

目指す児童像

学習に目的意識をもって取り組み、自分の考えを深めることができる子

目指す児童像にせまるための手だて

1 【学習の目的意識をもたせるための学習展開の工夫】

◎学習展開のモデルの確立

・文学的文章の学習で、「何をめざすのかという目的意識→学びの見通し・共有化→自分の考えをもつ→他者との言語活動→自分の考えの再構築」という学習展開を確立させる。

➡学習モデルを多様化し、ねらいや実態に応じて柔軟に展開できるようにする。

『紹介方法や学習の目的→ゴールイメージ』

『教師課題設定・児童の思いや願い（最初の読み取り）→深い読み取り（再構築）→紹介方法の選択』など。

◎「〇〇について考えたい」、「〇〇について紹介したい」などの仕掛け

・リーフレットづくり、紙芝居づくり、帯づくりなどのモデルを提示して、児童が学ぶ目的意識や単元を通してのゴールイメージをもてるようにし、「〇〇したい」を意図的につくる。

➡学習のねらいや実態に応じて、これまでの学習経験などから児童の反応を予想し、学習の初めだけではなく、学習の途中で児童が紹介やまとめ方の選択ができるようする。

◎児童が目的意識を共有し、学びの見通しをもって学習がすすめる

・「誰に」、「何の目的で」を導入で児童とともに話し合い明確にすることで、目的意識をもって学習に取り組めるようにする。

➡多様な読み方を習得し、それに合った紹介方法を選択できるような学習展開も考える。

2 【自分の考えをもち、他者との対話に興味関心・必要性をもたせるための学習展開の工夫】

◎教師がねらいを明確にもち、ねらいに即したモデルを提示し、言語活動を生かす

・人物像を捉えるための人物相関図、心情の変化や登場人物同士の関わり合いに着目させる、読み方や場面の移り変わりに着目させるなど、単元のねらいに即したモデル（リーフレットや紙芝居など）を提示する。

➡ねらいを明確にもち、学習のスタート時や学習途中で、教師がモデルを提示したり、児童に考えさせたり選択させたりする言語活動を計画する。

◎言語活動を生かした学習展開

- ・自分の考えを伝え、他者の考えに触れ、聞き合ったり質問し合ったりする学習展開を、年間を通して確立させることで、まずは自分の考えを相手に伝えたり、相手の考えを聞いたりすることを当たり前の環境にして、新たな考えや読み方に触れる喜びや楽しさを味わわせる。

3 【評価の工夫】

◎評価の可視化

- ・学習の初めの自己の考え方とその理由をノートに書かせ、言語活動を通じた学習の最後の自己の考えをリーフレットやノートなどにまとめることで一人ひとりの考えやその変容をアウトプットしたものを見取れるようにする。
- ・自分の考え、友達の間考え方や読み方、自分の中での新たな考えなどを書かせていくことで、言語活動や一人ひとりの思考を可視化できるようにする。

4 【教師の役割】

◎学習展開のデザイン

- ・学習が教師主体ではなく、児童主体ですすめられるように、教師の学習への関わりは最小限に留める。そのために、児童に問う、判断させる、価値付ける、全体で共有する、児童の考えを整理するなど、どの場面で授業をデザインするかを吟味する。

【高学年分科会】

目指す児童像

学習に目的意識をもって取り組み、自分の考えを深めることができる子

《分科会提案》

- ① 学習の目的意識をもたせるための学習展開の工夫
- ② 自分の考えをもち、他者との対話に興味関心・必要性をもたせるための学習展開の工夫
- ③ 評価の工夫
- ④ 教師の役割

1 研究授業について

- 第5学年 国語科 単元名 すぐれた表現に着目して、物語のみ力を伝え合おう「大造じいさんとガン」

指導者 久武 昌季

(1) 指導の工夫

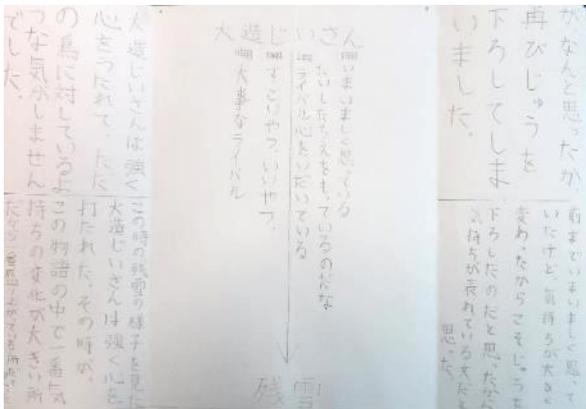
- ① クラスの友達にすぐれた表現や物語のみ力を、リーフレットを使って発表するという目標を授業の始めにもたせる。
- ② コラボノートを使うことで、クラス全員の考えを知る。
- ③ コラボノートやリーフレットから、考えの変容を見取れるようにする。
- ④ 過去の学びから今回のねらいを達成させるための、学習の流れを児童の発言から価値付けて共有していく。

(2) 本時の様子

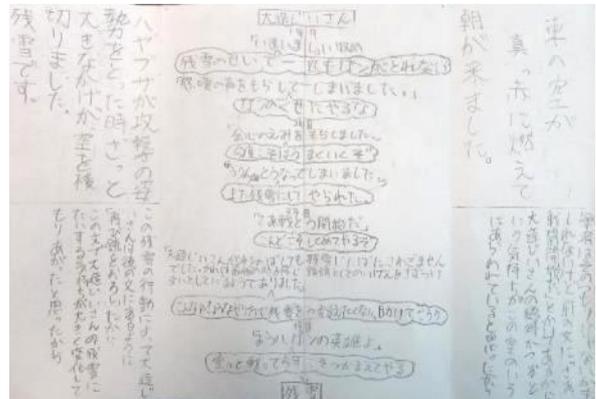
	主な学習活動	○指導上の留意点
つかむ	1 本時の学習課題を知る	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: fit-content;"> 友達の考えた、「大造じいさんの残雪への見方が変わった場面」の理由を読んで、さらに自分の考えを深めよう。 </div>	
取り組む	2 前時にコラボノートに書いた「大造じいさんの残雪への見方が変わった場面」友達の理由を読んで、前時の学習を想起する。	○ 銃を下ろしたときの大造じいさんの気持ちを考えさせる。 ○ ただの鳥に対してしているような気がしなかった理由を考えさせる。
	3 書き込まれた友達の考えを見て、共感することや考えを、コメント機能を使って記入する。 4 友達が書き込んだコメントを見て、自分の考えを再構築し、付箋に書く。	○ 自分と同じ場面に対し、友達は残雪に対して“尊敬”と感じていたが自分は生物の命の輝きを感じた。 ○ 自分とは違う場面を選んでいたら、理由を読んだら共感した。 ○ 自分の感想を友達のものとは比べながらコメントを記入させる。

ま と め る	5 友達の考えた理由やもらったコメントを参考に、次時にリーフレットを作することを予告する。	○ 自分と同じ場面に注目していたり、同じ場面でも友達と感じたことが違ったりすることに気付かせ、自分の考えを再構築させる。
------------------	---	--

【↓人物相関図を書くことで、物語の内容を押さえることができ、児童が対話しやすくなる。】



【↓1番〇〇な場面とその理由を書くことを目的に対話の必要性をもたせる】



(3) 協議内容

- 「同じ意見の人のコメント」の意図は？深めるといふ点については、コメントが単調になりがち。コメントは様々なところから広げるとよいのではないか。またコメントを書く際、視点があるとより、再構築を促せた。
- 言語活動をICTで行ったが、それが深まりにつながるのか。言語活動は、
 - ① 同じ立場で話し、考えを確認したり、より確かなものにしたりする。
 - ② 違う立場とも話してみる。
 と、なるはずである。ICT（コラボノート）は記録でよいのではないか。その上で、いくつか考えがまとまっていて、視点のよい物を選択し、提示していくことはできる。
- コラボノートを使うことの利点として、後から児童の考えが見取れることや普段意見をしない子も意見を言えることが挙げられる。
- 全員が考えをもっているのはよい。同じ色の人に聞きにいかせることでテンポアップできたのではないか。
- 意見を板書に残せばよかった。⇒一度、赤（ただの鳥に対しての気がしない）と黄（再び銃を下した）の理由を押さえたかった。
- 「すぐれた表現、魅力を伝え合う」ならば、表現に着目した意見交換があるとよかった。
- 国語科である。「どの叙述をもとに」があると読みが深まった。
- 児童が初めに選んだところ（赤、黄、青）は行動である。行動と心情をつなぐものとして、叙述や場面の様子を読み、深める必要があった。

(4) 指導・助言

講師 東京学芸大学准教授 細川 太輔先生

- ICTがよいのか？ 直接対話がよいのか？ どちらにもメリットとデメリットがある。
 - ➡ 組み合わせることで、メリットを際立たせ、デメリットを消す。

- 初めに本時の課題を板書した。本時のゴールは赤い付箋を書くことだったので「赤いふせんを書こう。」で十分であった。その後に、導入の時間でゴールとそのために必要な手立てを児童が理解していることが大切。

3つの資質・能力を育てる

特に、「主体的に学習に取り組む」を育てるために

- ・教師は、活動を与えない。
 - ・児童が学習計画を知っていて、教師に教えることができるレベルにする。
 - ・活動の意味を児童が説明できるようにする。
- コメントを入れている15分間は静かだか、全員がフル回転している。
全員が頭を働かせている⇒コラボノートのメリット
会話が長続きしない、往復が少ない⇒デメリット
口頭だと、表情、往復数が増える。⇒「デジタルと口頭の組み合わせが大切」
 - コメントの質
質問や意見の根拠を明らかにしておくことが大切である。
再構築には議論が必要である。⇒そのために教師ができることを考えておく必要がある。
 - 指導事項について
イ⇒エ⇒オ⇒カと段階を追う。
今回は「エ」であった。ただの心情変化なら、中学年の指導。描写がもとなら高学年の指導となる。

2 成果と課題

【成果】

- 単元のねらいを提示したときに、これまで実践してきた「リーフレットで伝える」ことを想起して児童からリーフレット作りが出てきた。みんなの意見を見たいという意欲が高まっている。
- ICT（コラボノート）を使ったことで、普段は発言しない児童の意見も知ることができた。
- リーフレット作りを目標にした「単元を貫く言語活動」を位置づけた学習をしてきたことにより、児童が主体的な学びを獲得してきている。
- 自分なりの読みをもった児童同士が意見交流をすることで、読みを深めることができた。

【課題】

- 授業中に意見のやり取りが少なく、タブレット操作をしている時間が長かったため、授業者に児童の反応や考えが伝わりにくかった。内容を深めるためには口頭による対話がよかったか。
- 目的意識をさらにもたせるため、学年の発達段階に応じた言語活動の内容や、単元の中での有効な位置づけについてさらに研究を深めたい。

【高学年分科会】

目指す児童像

学習に目的意識をもって取り組み、自分の考えを深めることができる子

《分科会提案》

- ① 学習の目的意識をもたせるための学習展開の工夫
- ② 自分の考えをもち、他者との対話に興味関心・必要性をもたせるための学習展開の工夫
- ③ 評価の工夫
- ④ 教師の役割

1 研究授業について

○ 第5学年 国語科 単元名 物語の面白さを伝え合おう 「わらぐつの中の神様」

指導者 屋島 健太

(1) 指導の工夫

- ① 単元を貫く学習課題の設定や、学習の途中に児童が紹介やまとめ方の選択ができるようにする。
- ② 学習材の面白いと思うところを児童に書かせ、教師が人物像や物語の全体像、表現の効果の3つに分類し、児童が自分の考えをもつことができるようにする。さらに、同じ視点のグループで理由を伝え合ったことをもとに違う視点のグループにも物語の面白さを伝えようという目的意識をもつことができるようにする。
- ③ 学習の振り返りでは、記述の観点を提示し、ノートに違う視点のグループの考えを聞いて、自分の考えに付け足された考えや、自分の中での新たな考えなどを書かせていく。
- ④ それぞれのグループの考えの理由を整理したり、複数のグループの考えのつながりを示したりすることで、全員が学習課題をつかめるようにする。

【↓第1時でこれまで学習した読み方を確認する】



【↓第2時で学習計画を立てる】



(2) 本時の様子

	主な学習活動	○指導上の留意点
つかむ	1 「物語の面白さを伝え合おう」という、本時の学習課題を知る ・ 「もう少し同じ視点の人と考えをまとめてから伝えたい。」	
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 違う視点の人に物語の面白さを伝えよう。 </div>	
	2 発表の仕方のモデルについて知る。 ・ 「私は、わらぐつの中の神様の面白さは、○○だと思います。教科書の○○ページ、○○行目を見て下さい。～と書かれていますよね。そこから私は、○○だと思いました。」	○ 聞き手が、自分とは違う視点のグループの考えをより興味関心をもって聞くことができるように、話し手の発表の仕方のモデルを提示する。
取り組む	3 同じ視点のグループで話し合い、自分の考えをより確かなものにする。 4 クラス全体で違う視点の人に物語の面白さを伝える。	○ 人物像の視点グループ ・ おみつさんは、わらぐつが売れなくてがっかりしていたけど、大工さんが「とてもじょうぶだよ」と言ってくれて、安心しているところからおみつさんの気持ちの変化が読み取れるところが面白いと思った。 ○ 物語の全体像の視点グループ ・ 物語の中に物語があるという文章の構成が面白いと思った。 ・ おみつさんの正体がおばあちゃんだつたと分かるところが面白いと思った。 ○ 表現の効果の視点グループ ・ 「白いほおが～」という表現がおみつさんの気持ちを表すのにつながりがあるところが面白さだと思いました。
まとめる	5 学習を振り返り、違う視点から気付いた面白さや自分の考えをまとめる。	・ 私は、わらぐつの中の神様の面白さは、文章の構成だと思っていて、おばあちゃんから昔話を聞く前と後でのマサエの変わりようが書かれているところから、この後の物語の続きが気になる場所も面白さだと思いました。

(3) 協議内容

- どのグループがどういう考えをもっているかを教師が把握しておくことで、児童と対話をしながら授業をデザインすることができていた。
- 今回学ばせたかった3つの分類は、児童の中でははっきりと分かれていなかったり、もっと細かく分かれていたりしていたのではないか。
- ➡ 最初に学習材の面白いと思うところを児童に書かせた時に、教師が問いを繰り返すことでもう少し深いものが書けるのではないか。そうして、児童が見出した分類をし、教師の

中で大きなグルーピングができていれば良いのではないか。

- 「誰に」、「何の目的で」をどのようにして決めたのか。
 - ➡ これまでに学習してきた物語の面白さを振り返り、学習材を通して「物語の面白さを伝え合おう」ということを目的として学習を進めていった。第一は読みの目的意識、第二に紹介の仕方を児童が選択をできるようにする。学習の初めに「誰に」を設定すると授業が限定されてしまうと考えた。これから児童の中から紹介の仕方が出てくるという想定であったが、今日の授業を見ていると「もっと聞きたい」が出そうなので、第二の目的を出すタイミングをもう少し見ていきたい。

(4) 指導・助言

講師 東京学芸大学准教授 細川 太輔先生

- 同じ立場で話し合うことと、異質グループで話し合うことの違う良さを子供たちが認識していることが素晴らしかった。
 - ➡ 何のために同質、異質のグループで話し合いをするのか。子供たちは考えを深められるということが分かっているが、何のために読みを深めるのかは分かっていないのではないか。目的のためにするのであれば分かりやすい。授業のはじめに発表するという目的を提示したほうがよかったように思う。
- 今日のゴールは何かを分かってから話し合いに移行するべきであった。
 - ➡ 「違う意見の人と話し合いたい。」→「でも他の子はまだ自信がない。」→「自信をつけてから異質グループで話し合いができるように、初めは同質グループでやろう。」というように児童がイメージをもって学習に臨めるとよい。
- 話型を示すことで根拠と理由を区別して話すことができた。
 - ➡ 根拠を示させる重要性は、同じ文を見ているのに違う意見なのかなど、根拠の文を示すことによって同じところや違うところが分かるということを知ることが意識できるとももっとよい。根拠の文を示すことで、その読み取りについての話し合いがはじまり、より深まるのではないか。
- グループの意見が異質グループかと思うくらい多様であった。同質グループで集まったはずなのに、ある子は大工の気持ちの変化、ある子は表現の効果、おみつさんの心情変化に注目しており、同質ではなくなっていた。物語の中に物語があるという子もいて、異質な学び合いがあり、多様な意見交換が行われていた。
 - ➡ 3、4人で自分の意見に自信をもたせるために同質グループで話し合いを行ってもよいし、はじめから異質で話し合ってもよいのではないか。
- 発表会で終わっており、どうしたらより深まる話し合いにできるのか、それをするのが先生の役割ではあるが、子供たち同士で行わせたい場合には、
 - ① 質問をする。
 - ② 複数回往復する
 - ③ 人数を減らす。という約束事を提示する必要がある。

「どうしてそう思ったの？」(相手の思考を理解する)

「気付かなかったな。その視点で考えてみるとこんなのもあるよ。」(新しい視点で考える)

「〇〇君の意見を聞いて、自分の考えが変わったよ。」(自分の意見が変わる)

➡ この三つが子供たちのミニ交流の中でもっと出てくると良いのではないか。

○ グループで分かれて学習をしているようで実はつながっているところがあるということに気付かせることができるようになった。

➡ 「気持ちの変化も表現に入るのではないか。」→「気持ちを表現した文章に注目する」→「表現と気持ちの変化をつなげてみた。」→「表現と結び付けて登場人物の心情を考えることが面白い。」

➡ 表現の効果と登場人物の心情が密接に結びついていることを教師が児童に紹介することができればよかった。

2 成果と課題

【成果】

○ 児童の反応を予想していたことで、対話をしながらクラス全体で考えをつなげることができた。

【課題】

○ 児童が見出した学習材の面白いと思うところと教師が分類した視点とのギャップがあった。

➡ 根拠の文を示すことで、その読み取りについて話をはじめ、子供たちが同じところや違うところを意識しながら学習を進めることができたのではないか。

○ 何のために違う人の意見を聞くのか、必然性がない。

➡ リーフレットづくりのために違う視点からの考えをまとめることを伝えておく。

➡ 学習の中で3つの視点から様々な考えに触れ、「自分の考えがどれか迷うな。」→「じゃあ3つの視点をリーフレットにまとめてみようか。例えば、こういうのはどう？」と促すことで、学習の途中に児童が紹介やまとめ方の選択ができるのではないか。

○ ノートに友達のことを書く時間をもたないかった。

➡ ホワイトボード→話し合いの中でホワイトボードにまとめる人→話し合い後写真を撮っておく→評価にも活用することができる。

○ リーフレットづくりのために違う視点からの考えをまとめることを伝えておく。

V 成果と課題

【成果】

○ 目的意識や学習の見通しをもたせる導入の工夫をすることで、児童が主体的に学習に参加することができた。

○ 言語活動を設定することで、対話に必要性が生まれ、児童が交流・共有を通して考えを再構築していく手立てとなることが分かった。

【課題】

● 児童に身に付けさせる3つの資質・能力と、主体的・対話的で深い学びの姿の位置付け。3つの資質・能力を、主体的・対話的で深い学びの授業改善の視点で身に付けさせていくことを確認して学習計画を立てる。

● 言語活動の発達段階に応じた系統性を検討することはできなかった。

VI 次年度に向けて

本年度の研究の成果と課題を生かし、次年度も【主体的・対話的で深い学びを通して教科のねらいに迫る】を主題に設定し、国語科の「読むこと」の「文学的文章」で研究を行う。

1 研究内容について

- 「主体的・対話的で深い学び」の視点を持ち、指導に必要な工夫を整理した上で、今年度に引き続き、国語の「読むこと」の文学的文章で、実践を行う。

今年度の研究に携わった教員

校 長 荒木 憲秀 副校長 眞砂 ひろみ	
分科会	部 員 (◎研究推進委員長 ○研究推進委員)
低学年分科会	・町原 桃子 ・関 隆史 ○小笠原 昌輝 ・長沼 祐一 ○寺元 さやか ・別府 法子 ・伊藤 妙子
中学年分科会	・下原 政宏 ・大橋 陽介 ・前沢 優 ○山口 大輔 ○佐藤 彩乃 ・矢花裕之
高学年分科会	・久武昌季 ・屋島健太 ◎望月心 ・渡邊亜紀 ・伊東明子 ○伊藤千代